今日の箇所は、今日、私たちが招かれた聖書の箇所は「民数記」です。「民数記」という名前は「民の数に関する書物」という意味です。民の数にどんな意味があって、この書物の題名になったのでしょうか。「民数記」には、二度にわたる人口調査が記録されています。そのため、この本は「民数記」と呼ばれるようになったのです。

「民数記」という書物

今日読んだ聖書箇所の背景や意味をより明確に理解するには、「民数記」という書物の前後の歴史的背景を知ることが必要です。ご存じの通り、「創世記」には、神による天地創造から、ヤコブの家族 70 人がエジプトに移住するまでの出来事が記されています。そして、エジプトで 430 年の歳月を過ごした後、神のしもべモーセの導きのもと、エジプトを脱出し、シナイ山に到着するまでの 3 ヶ月間の旅が記されている書物が「出エジプト記」です。私たちは普段「出エジプト記」と聞くと、出エジプトの全過程がすべて記録されているように考えがちですが、実際には、「出エジプト記」にはエジプトを出発してシナイ山に至るまでの 3 ヶ月間の旅だけが記されています。イスラエルの民はシナイ山に 1 年間滞在しましたが、この時に神さまから授かった律法が記された書物が「レビ記」です。「レビ記」の次に出てくる「民数記」は、「シナイの荒野」を出発し、約束の地であるカナンを目の前にした「モアブの草原」に至るまでの 38 年間の歴史が記された書物です。

二度の人口調査

今日読んだ「民数記」には、二回の人口調査が記されています。民数記 1 章 1 、 2 節には、「エジプトの地を出て二年目の第二の月の一日に、主は、シナイの荒野の会見の天幕でモーセに告げられた。『イスラエルの全会衆を、氏族ごと、一族ごとに調べ、すべての男子を一人ひとり名を数えて、その頭数を調べよ。』」とあります。イスラエルの民のうち 20 歳以上で戦いに出ることができる男性の数を数えさせたのです。そこで、各氏族、各部族ごとに数えた内容が、その後に記されています。その内容をすべて読む必要はないと思います。1 章 46 節をご覧になれば、数えられた合計が記されています。その数は 603,550 人でした(1:46)。それから 38 年の歳月が過ぎて「モアブの草原」に到着します。モアブの草原は、約束の地であるカナンと境を接する地帯です。神様は再びモーセに、イスラエルの民のうち、20 歳以上で戦いに出ることのできる者を数えるよう命じられました。民数記第 26 章 3 節と 4 節をご覧ください。

「そこでモーセと祭司エルアザルは、エリコをのぞむヨルダン川のほとりのモアブの草原で、彼らに告げた。『主がモーセに命じられたように、二十歳以上の者を数えなさい。』」

シナイ山を出発した時についで二度目に民の数を数えるよう命じられたのです。そこで、5 節以降を見ると、部族ごと、氏族ごとに数える過程が記されています。26 章 51 節には数えた総数が記されています。その数は 601,730 人でした。ここにはレビ人は含まれていません。すなわち、シナイ山では 603,500 人、38 年後のモアブの草原では 601,730 人でした。

ところで、興味深いのは、シナイの荒野にいた 60,3550 人のうち、38 年経ってモアブの草原で数えられた 60,1730 人の中に再び含まれていたのは、ヨシュアとカレブの二人だけだったという点です。言い換えれば、38 年を経た 2 回の人口調査の両方で数えられたのは、ヨシュアとカレブだけでした。この点について述べているのは、26 章 63 ～ 65 節です。

「以上(601,730 名)が、エリコをのぞむヨルダン川のほとりのモアブの草原で、モーセと祭司エルアザルがイスラエルの子らを登録したときに登録された者たちである。しかし、この中には、シナイの荒野でモーセと祭司アロンがイスラエルの子らを登録したときに登録された者は、一人もいなかった。それは主がかつて彼らについて、『彼らは必ず荒野で死ぬ』と言われたからである。彼らのうち、ただエフンネの子カレブとヌンの子ヨシュアの他には、誰も残っていなかった。」

とても重要な情報です。シナイ山を出発した人々の中、38 年後にモアブの草原で再会し、二度目の人口調査に含まれたのはヨシュアとカレブだけで、他の人は皆、荒野で死んだのです。今回モアブの草原で数えられた 601,730 人のうち、ヨシュアとカレブ以外の人は、シナイ山を出発した後で荒野で生まれた第 2 世代です。これが民数記が語る重要な数字です。今日、私たちの関心を引くのは、この数字を通して、神様は私たちに何を伝えようとしておられるのかという点です。

鍵を探して

問題は、シナイ山を出発した人々は荒野で皆死んでしまったのに、どうしてヨシュアとカレブだけは、38 年の間を置いた二つの場所での人口調査の両方に含まれることができたのでしょうかという点です。他の人々は皆、荒野で死に、荒野で生まれた第二世代の人々だけがモアブの草原に到着したのに、どうしてヨシュアとカレブだけは死なずに生き残り、モアブの草原で再会できたのでしょうか。これが私たちが解決すべき課題です。同時に、この点が「民数記」という書物が私たちに伝えようとしているメッセージです。

この民数記のメッセージを解き明かす鍵となるのが民数記 13 章と 14 章です。民数記 13、14 章を全部読めたらよかったのですが、時間の関係で一部だけ読みました。皆さんは内容を既にご存じかと思いますが、私が簡単にまとめてみます。

イスラエルの民がパランの荒野のカデシュ・バルネアに到着したとき、カナンの地を偵察するために 12 人の偵察隊を派遣しました。彼らは 40 日間、カナンの地を偵察しました。彼らは、土地が肥沃かどうか、町々の構造、主要な産物、民族の分布、住民の身体的特徴、軍事情勢などを詳細に調査しました。彼らは戻ってくると、民たちにその偵察した地について報告しましたが、それが 13 章 26 節以降の内容です。ところが、12 人の偵察隊のうち、10 人の報告はとても否定的でした。10 人の偵察隊は、結論として、到底カナンの地を手に入れることはできないと言います。砂漠を旅して疲れきっているイスラエルは、武装したカナンの住民と戦って勝つことはできないと、その地を悪く言いふらしました。特に、堅固な城塞を見たし、体格の立派なアナク人の子孫やネフィリムの子孫（33 節）を見たと報告しました。「ネフィリム」

という言葉は、聖書で2回しか出てこない言葉です。そのため、「ネフィリム」が何を意味するかは意見が分かれますが、一般的には体格が立派な種族を指すものと見なされています。でも、イスラエルの民は、自分たちが見てもイナゴに過ぎません。自分たちは砂漠を彷徨う旅人なのだから、到底勝てないと考えました。むしろエジプトに帰るほうがいいと主張します。これが 14 章 1 節以降の内容です。皆さん、想像してみてください。パランの荒野に集まった約 200 万人のイスラエルの民が、泣き叫びながら指導者たちを非難したのです。「我々はむしろエジプトの地で死ぬか、この荒野で死ぬほうがましだ。勝てる見込みもないカナンの地へは行けない」と主張しました。「我々を埋葬する場所がないから、ここまで連れてきたのか」と指導者たちを非難しました。しまいには「かしらを一人立てて、再びエジプトへ帰ろう」と主張しました。

でも、ヨシュアとカレブの主張は違いました。13 章 30 節をご覧ください。「カレブがモーセの前で、民を静めて」とこう言います。「私たちはぜひとも上って行って、そこを占領しましょう。必ず打ち勝つことができます」と。他の 10 人は「絶対勝てない」と言いましたが、ヨシュアとカレブは「絶対勝つ」と確信していたのです。14 章 6 節を見ると、「すると、その地を偵察して来た者たちのうち、ヌンの子ヨシュアとエフンネの子カレブが、自分たちの衣を引き裂き、『もし主が私たちを喜んでおられるなら、私たちをあの地に導いてくださる。』」と言い、必ずや勝利できると語りました(13:30)。「衣を引き裂いた」という言葉には「心の内をさらけ出す」という意味があり、悲痛な心情を吐露する表現です。否定的な 10 人の報告を聞いて落胆していた彼らに対し、ヨシュアとカレブは、「私たちはカナン人と戦って、必ず勝つことができる」と報告したのです。10 人の偵察隊がカナンの地を悪く評価したのとは対照的に、ヨシュアとカレブはその地を「乳と蜜の流れる地」だと高く評価しました。この相反する報告が、イスラエルの民の運命を決定づけました。この報告の違いが、イスラエルの民の生と死を決定づけたのです。

いかなる根拠で

今日、私たちに疑問として残っているのは、ヨシュアとカレブは、他の 10 人とまったく同じ現実を見てきたにもかかわらず、どのような根拠に基づいて「必ず勝てる」と報告したのでしょうか。ヨシュアとカレブは、他の人たちには見えなかった何を見たのでしょうか？ヨシュアとカレブも、堅固な城塞を見、屈強なアナク人の子孫やネフィリムの子孫を見、カナン人の軍事力を見たにもかかわらず、いったいどのような根拠に基づいて「必ず勝てる」と言ったのでしょうか。これが 14 章の内容です。同時に、これこそが、今日私がお話ししたい核心です。14 章を読むと、ヨシュアとカレブが「必ず勝利できる」と確信していたその根拠が何であったかがわかります。わかりやすく 3 つに分けて説明します。

第一に、14 章 9 節をご覧ください。

「ただ、主に背いてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちの餌食となる。彼らの守りは、すでに彼らから取り去られている。」

そして、非常に重要な言葉を語ります。**「主が私たちと共におられるのだ。」**（the Lord is with us）

人間の目で見れば、攻略不可能な堅固な城塞があり、屈強な体格のアナク人の子孫たちを目にしたものの、主が私たちと共におられるという確信があったからこそ、必ず勝利できると報告しました。神が共におられるという信仰のゆえに、ヨシュアとカレブは、絶望的な現実にもかかわらず、必ず勝利できると確信していたのです。私たちにも、自分では乗り越えられないような困難なことや、辛いことがあるかもしれません。でも、落胆しないでください。神様が私たちと共におられるという信仰を持って生きてください。

第二に、14 章 11 節をご覧ください。

「主はモーセに言われた。『この民はいつまでわたしを侮るのか。わたしがこの民の間で行ったすべてのしるしにもかかわらず、いつまでわたしを信じようとしないのか。』」また 22、23 節をご覧ください。**「わたしの栄光と、わたしがエジプトとこの荒野で行ったしるしとを見ながら、十度もこのようにわたしを試み、わたしの声に聞き従わなかった者たちは、だれ一人、わたしが彼らの父祖たちに誓った地を見ることはない。わたしを侮った者たちは、だれ一人、それを見ることはない。」**

神様はこれまでイスラエルの民をしるしと不思議をもって導いてこられましたが、これまで共におられた神様を信じない民を叱責しているのです。でも、ヨシュアとカレブは、これまで導いてこられた神さまへの信頼を失いませんでした。言い換えれば、ヨシュアとカレブは、これまで共にいてくださった神さまが、これからも導いてくださると信じていたのです。御力によって紅海を渡らせてくださり、雲の柱と火の柱で導いてくださった神さまは、これからも導いてくださることを信じていたのです。これまで共におられた神の導きを数え切れないほど目にしてきたにもかかわらず、信じない民を、神は叱責されたのです。でも、ヨシュアとカレブは、これまで共にいてくださった神さまは、これからも共にいてくださると確信していたので、必ず勝利できると報告しました。私たちも困難に直面したとき、落胆することなく、これまで私を導いてくださった神様は、これからも導いてくださると信じて生きていかれますように。

第三に、ヨシュアとカレブが必ず勝利すると確信していた根拠は、神の約束を信じる信仰によるものでした。14 章 23 節をご覧ください。カナンの地を何と言っていますか？単に「カナンの地」とは言わず、「わたしが彼らの父祖たちに誓った地」と言っています。また 30 節をご覧ください。

「エフンネの子カレブと、ヌンの子ヨシュアの他は、おまえたちを住まわせるとわたしが誓った地に、だれ一人入ることはできない。」

ここでもカナンの地を「わたしが誓った地」と言っています。イスラエルの民にカナンの地を与えると、神様がすでに約束なさった土地でした。実のところ、その土地は、民の戦いや能力とは関係なく、彼らの先祖に与えると既に約束な

さっていたのです。ヨシュアとカレブには、この約束を信じる信仰がありました。創世記の時点からこれは約束されていました。創世記 17 章 8 節には、「わたしは、あなたの寄留の地、カナンの全土を、あなたとあなたの後の子孫に永遠の所有として与える。わたしは彼らの神となる」とあります。既にカナンの地をイスラエルの民に与えるとアブラハムに約束なさっていたのです。イサクにも約束なさいます。「あなたとあなたの子孫に、わたしがこれらの国々をすべて与える」とあります（創 26:3)。ヤコブにも約束しました。「わたしは、アブラハムとイサクに与えた地を、あなたに与える。あなたの後の子孫にも、その地を与えよう。」（創 35:12）出エジプト記でも約束しました。「わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓ったその地にあなたがたを連れて行き、そこをあなたがたの所有地として与える。」（出 6:8）出エジプトを目の前にしての約束です。13 章 11 節でも繰り返されます。「主が、あなたとあなたの父祖たちに誓われたとおりに、あなたをカナン人の地に導き、そこをあなたに与えられるとき…」と言って、カナンの地をイスラエルの民に与えるとの約束を繰り返し繰り返し明らかにされました。この約束はその後も続きます。「あなたがたがカナンの地に入るときは…」と言いつつ、彼らが守るべき律法を教えました。

このように、カナンの地は、既にイスラエルの民に与えると約束された地でした。それなのに、10 人の偵察隊はこの繰り返された約束を信じません。でも、ヨシュアとカレブだけはこの約束を固く信じていたのです。神の約束は破棄されることはありません。人の約束は破られますが、神の約束は破られることはありません。人の約束は破られ、人の誓いも破棄されます。国と国との条約も破棄されます。でも、神の約束は破棄されることのない約束です。この決して破られることのない神の約束に対する信仰、これがヨシュアとカレブがカナンの地を征服できると確信した根拠です。この確信があったからこそ、二人は他の 10 人の偵察隊と同じように惨憺たる現実を目の当たりにしたにもかかわらず、落胆しなかったのです。その違いは単純でした。10 人の偵察隊は、目の前にある現実、それだけを見ていました。彼らはその地の住民と堅固な城塞しか見ていませんでしたが、ヨシュアとカレブは現実を超えたところにある神の導きの御手と神の約束、そしてその約束を守られる神の誠実さを見ました。のみならず、これまで私たちと共に歩んでこられた神さまを見る信仰の目を持っていたのです。

雲の柱と火の柱とは何でしょうか？「神であるわたしが、あなたがた、民と共にある」という、目に見える証拠、物証です。人間はとても弱く、すぐに不信仰になるので、神さまは、私たちの目や視覚を通して確認できるよう、雲の柱と火の柱をもって、「私があなたがたと共にいる」という証拠を示してくださいました。イスラエルの民がカナンの地を目指してエジプトを出て荒野を旅する中で、「モーセとアロンがあなたがたの導き手ではなく、このわたしが導き手だ」ということを、神さまは幾度も示されました。紅海を渡らせたこと、これは人の力では成し得ないことでした。火の柱と雲の柱で彼らを導いてくださいました。たくさんの方法を通して、神様は「わたしがあなたがたと共にいて、わたしがあなたがたを導いている」という事実を示されたにもかかわらず、彼らは神様を信じなかったのです。シナイの荒野を出発した 603,550 人が砂漠で死ぬしかなかったのは、彼らが病気になったからでも、か弱かったからでもありません。不信仰の罪のせいで、彼らは荒野で皆倒れてしまったのでした。

民数記 14 章 22 節以下を見ると、**「わたしの栄光と、わたしがエジプトとこの荒野で行ったしるしとを見ながら、十度もこのようにわたしを試み、わたしの声に聞き従わなかった者たちは、だれ一人、わたしが彼らの父祖たちに誓った地を見ることはない。ただし、わたしのしもべカレブは、ほかの者とは違った霊を持ち、わたしに従い通したので、わたしは、彼が行って来た地に彼を導き入れる。彼の子孫はその地を所有するようになる」**と仰せになります。

これこそが、まさに民数記を解き明かす鍵です。シナイの荒野を出発した 603,550 人が荒野で皆死に、38 年の歳月が過ぎた後に、ヨシュアとカレブだけがモアブの草原で再び会うことができたのは、彼らが病気にならなかったからでも、健康だったからでもありません。神の約束を信じたからです。だから、シナイの荒野を出発したヨシュアとカレブだけは、38 年後に、モアブの草原で再び会うことができ、ついにはカナンの地に入ることができたのです。

今日への教訓

38 年の間を置いたこの 2 回の人口調査を通して、神様は私たちに何を語っておられるのでしょうか。

たとえ私たちの目の前で困難な事が起きたとしても、落胆しないでください。予期せぬ困難に直面しても、驚かないでください。

1. 神様は私たちと共におられます。神様は私たちのそばにいらっしゃいます。

2. これまで私たちと共にいてくださり、私たちを守り、導いてくださった神様は、これからも私たちを導き、守ってくださいます。

3. 神様の約束は破棄されません。その約束の言葉を信じて生きていかれますように。神様への希望を失わないでください。神様は約束を誠実に守ってくださるお方です。不信仰は、すでに与えると約束された地を相続地として受け取ることができなくします。相続地は神さまからの贈り物ですが、そこには信仰を通して入ることができます。ヨシュアとカレブは、体が丈夫だったからカナンの地に入ったのではありません。神への信仰を失わなかったからです。

私たちもこの地で生きていく中で、さまざまな困難に直面します。時には健康を損なうこともあれば、愛する家族と別れることもあれば、事業に失敗することもあります。入試に落ちることもあります。仰生活を始めるときには予期できなかった不幸に見舞われることがあります。でも、落胆しないでください。神様は私たちと共にいてくださり、これまで私たちを導いてこられたその神様は、これからも私たちを導いてくださいます。そして、約束に誠実な神様は、私たちと交わしたその約束を必ず果たしてくださいます。この信仰をもって生きる聖徒となられることを願います。